

幻の京都新城 — 豊臣秀吉最後の城 —

<http://www.kyoto-arc.or.jp>

(公財) 京都市埋蔵文化財研究所・京都市考古資料館



写真 1 京都新城の堀の石垣 (調査①: 東から)

はじめに 2019 年度に京都大宮仙洞御所内で行なった発掘調査で、京都新城に関する遺構を初めて確認しました (写真 1)。豊臣秀吉がその生涯で最後に築いた城であることもあり、メディアで大きく取り上げられました。

あれから 3 年、昨年度に大宮仙洞御所内で行なった調査において、京都新城に関する遺構を、また新たに確認することができました。

京都新城とは 慶長 2 年 (1597) に豊臣秀吉が内裏南東側に築いた城です (図 1)。規模は南北 6 町 (約 0.8km)、東西 3 町 (約 0.4km) で、面積は京都御苑の約半分の広さの 18 町に及びます。当時は「太閤御屋敷」などと称され、施設には「寝殿」「広縁」「ハコ瀬カ池」「南面御門」「城ノ

やぐら うちべい 矢倉」「内屏」「南城ノ屏」「石垣」があったことが史料から知られています。城は約 5 ヶ月というスピードで完成し、その年の 9 月には息子の秀頼が内裏に参上する際に利用しています。しかし、翌 3 年に秀吉が死去して、秀頼は大坂城へ移り住むことから、秀吉や秀頼はこの城をほとんど使用しなかったようです。

その後、慶長 4 年 (1599) に秀吉正室の高台院 (おね) が移り住んだことから、以後「高台院屋敷」と呼ばれるようになります。同 5 年には、関ヶ原の合戦を目前に門・櫓・堀・石垣といった防御施設が取り壊されました。そして、寛永元年 (1624) に高台院が死去した後、同 4

年に高台院屋敷をほぼ踏襲したかたちで仙洞御所が造営されます (「中むかし公家町之絵図」、「寛永十四年洛中絵図」)。現在、京都大宮仙洞御所の庭園にある「阿古瀬淵」^{あこせふち}は、京都新城の「ハコ瀬カ池」の名残りとして伝えられていますが (『山州名跡志』)、城の具体的な範囲や構造の詳細はよくわかっていませんでした。

調査成果 以下に紹介する 3 つの調査では、寛永 4 年 (1627) の仙洞御所造営に伴う整地土の直下で遺構を検出しました。このうち調査①・②の遺構は、出土遺物の年代などから京都新城に伴うものと判断しています。

調査① (2019 年度発掘) では、東に面を揃えた南北方向の石垣と、

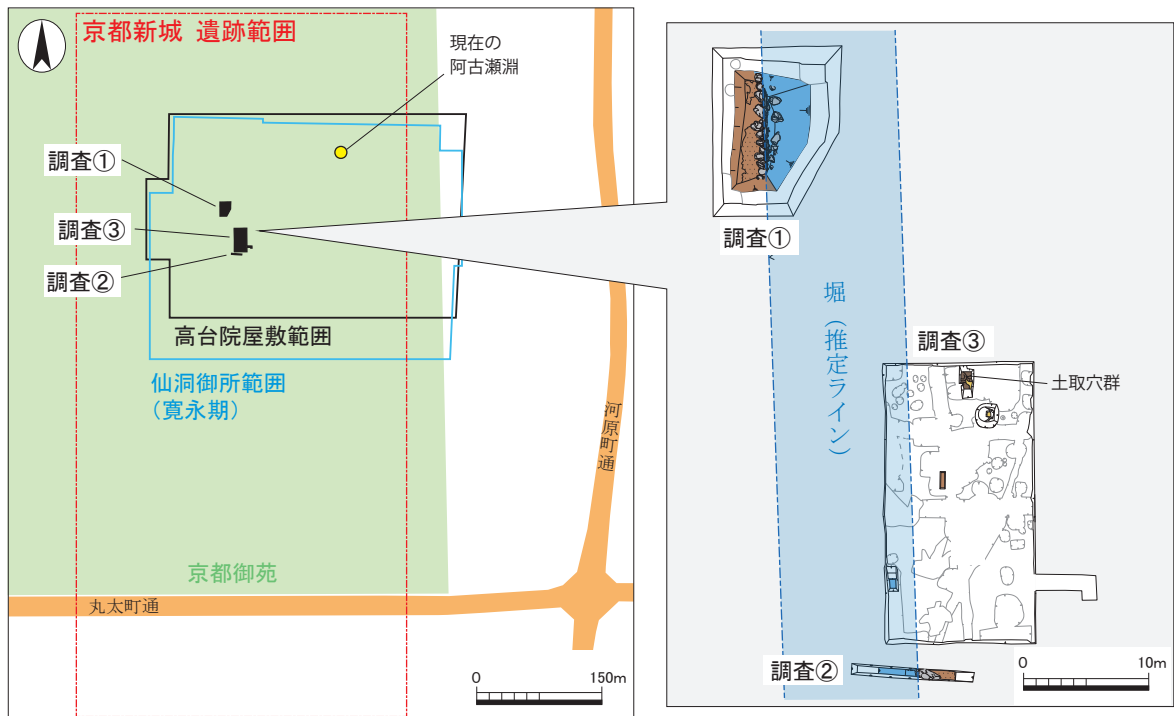


図1 京都新城と調査地の位置

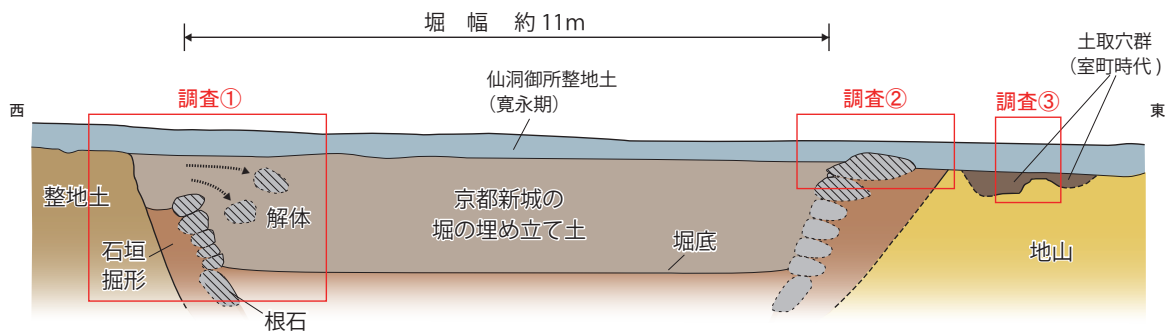


図2 堀の断面模式図

その東側で堀を確認しました（写真1）。石垣は、検出長約8m、高さ1.0～1.6mで、長さ0.8～1.1mの石材を3～4段、野面積みで構築しています。上部は解体されており、本来はさらに2段程度、石が積み上げられていたようです。石垣上端から堀底までの復元高は約2.4mとなります。石垣と堀は、仙洞御所造営によって解体・埋め立てが行なわれていました。堀の埋め立て土からは、豊臣家の家紋である桐文の金箔瓦が出土しています。

調査②（2022年度試掘）では、西に面を揃えた南北方向の石垣と、

その西側で堀を確認しました。石垣は、検出長約0.6m、高さ約0.7mで、最大長約1.8mの石材を2段以上、野面積みで構築しています。最下段は検出できていません。

調査③（2022年度発掘）では、室町時代の土取穴群を検出しましたが、それよりも新しい京都新城に関する遺構は見つかりませんでした。また、調査区の土層を検討したところ、地山の上に直接、寛永期の仙洞御所造営に伴う整地土が堆積しており、京都新城に伴う整地土は確認できませんでした。

おわりに 調査①・②で検出した石垣は、その対面する位置関係

から、同じ堀の西肩と東肩にあたる可能性があります。仮に、この堀が南北方向に向かって直線的に延びるとした場合、堀の幅は約11mと推定できます（図2）。

一方、調査③は京都新城の曲輪の内部を捉えた調査でしたが、城に関する遺構や整地土は見つかりませんでした。寛永期の仙洞御所造営の際に削り取られてしまったのかもしれません。

京都新城が、輪郭の掴めない「幻」の城となった原因の一つに、江戸時代に行なわれた仙洞御所の造営があると考えられます。

（中谷 俊哉）